

《研究ノート》

北部タイ山間部における 自然・社会環境の変化と農民の適応

—タイ族とモン族の混合村落における

両者の適応の違いについて—

鶴田 格*

はじめに

タイ国北部の山間部には従来より様々な山地少数民族が住んでおり、その多くは焼畑耕作を行ってきた。1950年代以降、この山地民じたいの人口増加に加えて、低地部における人口増により平地での水田農業の余地をなくしたタイ族¹⁾が山間部に耕地を求めて広がり始めた。かかる山間部における農業の急激な拡大は、近年の北部タイにおける急速な森林破壊²⁾の一因となっている。一方これを農民の側からみると、人口と資源のバランスの喪失は深刻な耕地不足を引き起こしており、新たな耕地の開墾はさらなる森林破壊をもたらすという悪循環となっている。

本稿は、このような状況におかれている北部タイ山間部の一農村における、激変する自然及び社会的環境に対する農民の適応に関する事例的報告である。調査対象としたチェンライ県 R 村は、その特殊な成立事情により、低地から

*つるた ただす、京都大学大学院農学研究科

1) ここでは北タイ人つまりコン・ムアン *khon mueang* のことを指している。以下、コン・ムアンと表記する。

2) ROYAL FOREST DEPARTMENT [1985, 1995] の統計値によれば、1973年からの20年間でタイ北部の森林面積は33.8%減少している。

移住してきたコン・ムアンと山地少数民族であるモン³⁾という全く異なる言語と生活習慣をもつ二つの民族から構成されている。本稿では、この二つの民族のそれぞれの適応の仕方の違いを、同村における土地利用をも含めた農業生産様式の変容を中心として明らかにしていきたい。なお本調査は、トヨタ財団から研究助成を受けた「タイ国北部の焼畑から常畑への移行過程における耕地生態と村落社会の変容に関する研究」(研究代表者・服部共生)の一環として、1993年3月、同年9月および1994年3月の計3ヶ月間にわたって行なった。

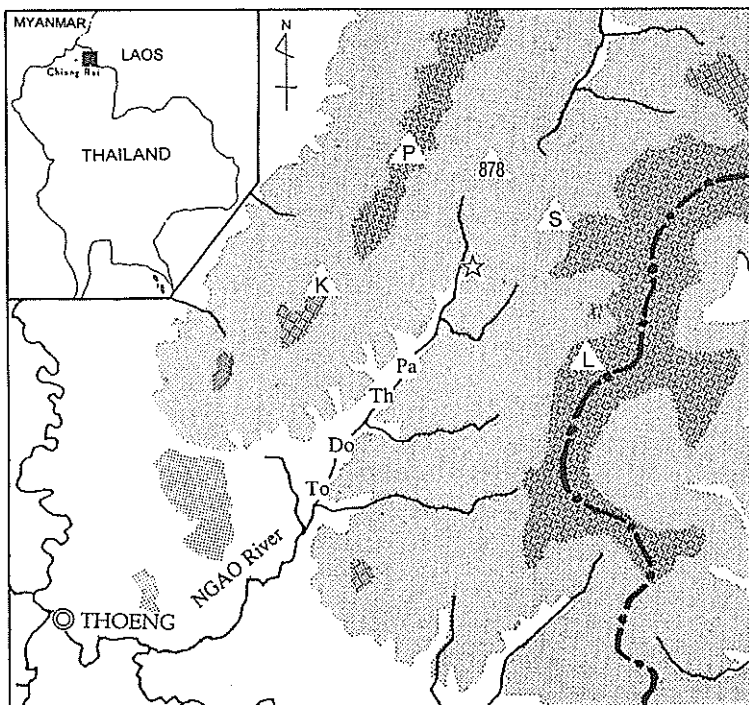
1. 調査村の概況

(1) R村の位置と成り立ち

R村はタイ国の最北部、ラオス国境近くの二つの山脈にはさまれたンガオ川流域に位置する(図1)。村は舗装された幹線道路沿いに位置しているため、他の村や町への交通は比較的便利な地域である。

R村には、もともと山地少数民族のヤオ族が住んでいたが、1967年にその近辺で共産ゲリラとタイ国軍の衝突が起これると、戦乱を避けて住民は村を放棄した。1980年の紛争終結後、タイ国軍は治安維持を目的として地域への再定住政策を立案し、土地なし層を含む低地の貧しいコン・ムアン農民に対し、R村を含む3つの新しい村が提供されることとなった。1982年に、R村にはコン・ムアン農家50世帯が入植した。当初は水田に適した土地15ライ(1ライ=約0.16ha)が提供される、という約束だったが、実際に移住してみるとそれは急傾斜の森林にすぎず、水稲作ができないと知った住民の大部分は徐々に出身村に帰っていった。R村に最初に移住してきたコン・ムアンの出身地は、Do村、Th村、To村などのンガオ川下流域のコン・ムアンの村が主なものである(図1参照)。この3村からは当初それぞれ11世帯、10世帯、10世帯が移住してき

3) ここでいうモン *hmong* とは、タイにおいて以前はメオ族と呼ばれ、中国においては一般に苗族と呼ばれているのと同じの民族を指している。



【凡例】

☆ 調査村

△ モン族村落

Pa タイ族村落

■ $\geq 1000\text{m}$

■ $\geq 500\text{m}$

□ $< 500\text{m}$

~~~~~ 河川

--- タイ・ラオス国境

第1図 調査村の位置

たが、その中で現在残留しているのは各々5世帯、2世帯、1世帯にすぎない。

1987年にコン・ムアの世帯数が半数近くまで減少した時点で、上部山地の村よりモンが移住しはじめ、現在では多数を占めている。モン世帯のうち約半数（19世帯）はP村から入植し、S村からは7世帯、K村からは5世帯が移住してきた。図1にあるように、これらの蒙の村々はいずれも標高1,000m付近に位置しており、これはアヘンの原料となるケシ栽培が十分可能な高さである。蒙の移住の理由で最も大きなものは、もとの村は道路事情が悪いため、

商品作物が売りにくく、病人がでた時に困るから、というものである。他に、日常の水の便が悪い、人口圧による耕地の不足、なども理由として挙げられた。

## (2) R村の社会構成

全56世帯（1993年3月現在）のうち17世帯がコン・ムアン、39世帯（3分の2以上）がモンによって占められている。全人口335人のうち、コン・ムアン65人に対して、モンは270人（約8割）である。一世帯あたり平均の家族員数は、コン・ムアン3.8人に対し、モンは6.9人ということになる。特に10歳以下のモンの子供が非常に多いのが、年齢別の人口構成上の顕著な特徴である。家族構成については、コン・ムアンの全世帯及び蒙ンの30世帯が核家族であり、残りの9世帯は2組以上の夫婦が同居する拡大家族である。コン・ムアン、モンともに、この世帯が独立した農業生産の単位を成している。

現在残留しているコン・ムアンの各世帯は、血縁的には互いに関係が少なく、大きな親族集団は存在しない。ただし、こちらにきてからの婚姻によって新たな姻戚関係がいくつか成立している。モンに関しては、R村にはFa、Yang、Li、Thoの4つの「姓（saen）」（父系の外婚集団）があるが、同姓でも血縁関係にあるとは限らず、同姓の者どうしが特定の集団を形成しているわけではない。

教育水準に関しては、コン・ムアンとモンの間には顕著な格差がみられる。13歳以上の蒙のうち、小学校に1年以上通った経験のあるものは約6分の1にすぎず、それはすべて男性である。それに対してコン・ムアンの成人のほとんどは、男女を問わず小学4年ないしは6年以上の学歴をもつ。しかし現在では蒙の少年少女にも教育を受ける機会は増えており、開村時に設立されたR村の小学校の生徒75人のほとんどはモンである。

R村は行政的には、低地Pa村の「支村（muban sakha）」として位置づけられており、通常の行政村にあるような政治的発言権なり決定権がないが、村民によって選ばれる村長が存在し、村落委員会が組織されている。創村以来つねにコン・ムアンが村長となってきたが、ここ3代は近年の人口構成上の変化を反映して、モンが村長の座を占めている。

### (3) R村における生業

R村における主要な生業は焼畑農業である。2～3月に一次林もしくは休耕地を伐開し、倒木を十分に乾燥させたうえ、3月から4月にかけて火いれを行う。コン・ムアン、モンともに主食としての陸稲生産（5～10月）を行い、換金作物としてコン・ムアンはトウモロコシ（雨期4～9月と乾期10～3月）、モンはショウガ（4～9月）やキャベツ（乾期3～6月と雨期7～10月）等を生産している。またコン・ムアンは水田（6～12月）も耕作している。

農業以外の現金収入を得るために、少なからぬ数のコン・ムアン男性は、日雇い労働やバンコクへの出稼ぎを行っている。それに対して、モンで外部に出稼ぎに行く者はほとんどない。低地のタイ人社会では異民族であるモンが働く場所を見つけるのは難しいから、現時点でR村の蒙ンの雇用機会としては、同じモンに農業労働者として雇われる以外にはない。

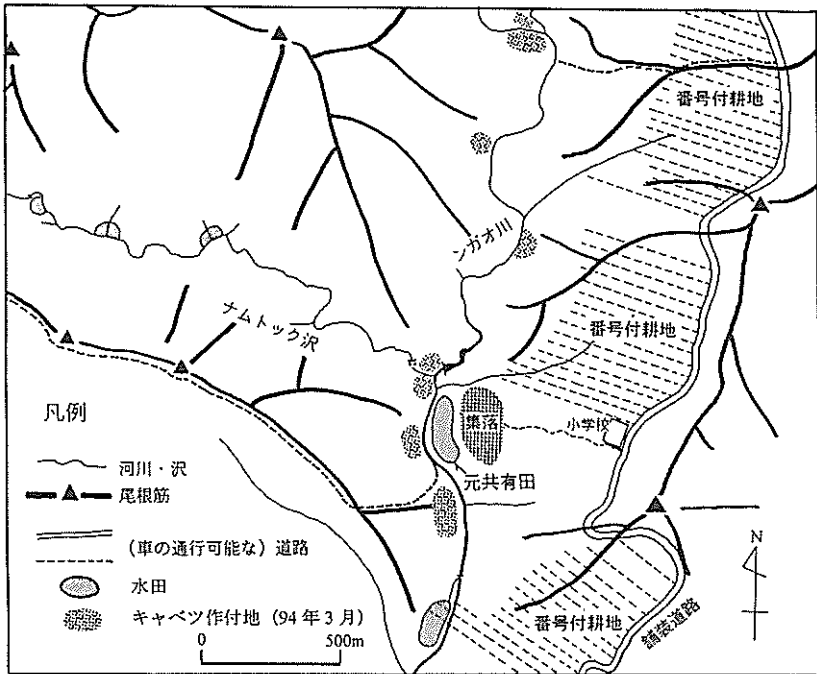
## 2. 土地利用の変遷

### (1) R村の耕地

本村の耕地は、おもにンガオ川をはさんだ東側斜面、西側斜面およびンガオ川に西北からそそぐナムトック沢という沢筋に展開する（図2）。

入植時にタイ国軍によって配分された土地は東側斜面にある。舗装道路からンガオ川の沿岸まで標高の高い方から低い方へ帯状に分割されており、それぞれに1から50までの番号がついている。この番号付耕地は、原則としてひとつの世帯につき1ヶ所が割り当てられている。この他に、集落とンガオ川の間には軍が造成した水田が3ライほど存在し、以前は村の共有田として水稻の共同生産が行われていたが、その後各コン・ムアン世帯に対して配分された。これらの軍によって割り当てられた土地に対する法的な所有権はないが、村民は土地の使用権（*sitthi tham kin*）を認められている。

軍から配分された土地以外に、本来国有保護林（*pa anurak*）にあたる地域を村民が自ら開拓し、無断で占有した土地がある。無断占有地の多くはナムトッ



第2図 調査村の耕地

ク沢の流域にあり、おもにコン・ムアンが沢筋にそった下部を、モンが上部を占有している。耕地はあちこちにちらばっているのが普通であり、平均して一世帯あたり約4.5ヶ所の圃場を保有している。

## (2) R 村内における土地利用の変遷

入植当初のコン・ムアンは、主としてナムトゥック沢本流域の一次林において、開墾初年度の陸稲→2年目のトウモロコシという作付パターンにそって耕作していた。しかし近年では、近場にある一次林の減少とともに、手間暇かけて遠くの未耕作の森林 (*pa kae*) を求めて伐開するような方法はとらずに、番号付耕地を含む手近な休閑地や二次林 (*pa lao*) あるいは毎年使用する耕地を使う

傾向が強い。例えば陸稲については、集落から近い3～4年休閑した耕地を伐開して使用する世帯が多く、一方で販売用のトウモロコシは、運搬の手間を省くため番号付耕地の道路ぎわで連作される場合が多い。陸稲作において除草剤や肥料を投入することは基本的にないが、トウモロコシ作においては除草剤と肥料を使用した常畑的土地利用が行われている。

モンの場合もコン・ムアンと同様に、入植直後はすぐ番号付耕地を使う事はなく、親戚の耕地を使わせてもらうか、あるいは自らナムトック沢上流部の無主の一次林を開墾して陸稲を優先的に作付した。余裕があれば同年あるいは翌年から、コン・ムアンと同様に前年度陸稲を作付した耕地でトウモロコシを作って販売し、次なる換金作物生産へ向けて資金作りをした。当初わざわざ山奥の森林を探し、番号付耕地をすぐに使わなかった理由は、R村の元住民が長年使用してきた番号付耕地には、*Imperata* 属の雑草等が繁茂するやっかいな二次林が多かったのと同時に、その境界は曖昧で使用できる耕地の位置がすぐには確定しなかったからである。その後、番号付き耕地の境界は計測により確定し、近年ではナムトック沢上流部などの遠い山上で耕作するモンはごく少なくなり、自給作物・換金作物を問わず、番号付耕地を中心とした集落に近い場所を連続的に使用する事が多い。

93/94年度のモンの場合、陸稲作付農家の約半数は前年度ショウガ等を作付した耕地を、休閑期間をおかずに（トウモロコシ乾期作をはさんで）使用している。同一耕地を連続して3年以上使用している農家も多い。これらの耕地は、いずれも集落に近い便利な場所にあるのが特徴である。耕地の連続使用による地力の低下と雑草の繁茂を防ぐため、同年度に陸稲を作付したモン36世帯のうち4割は除草剤を、3割は肥料を投入している。除草剤は、平均すると1世帯あたり588パーツ（1993年時点で1パーツ＝約4.4円）、肥料は1世帯あたり466パーツを投資している。このように安易さと便利さをもとめて、高い肥料代と除草剤代を払ってでも、近場で常畑的な陸稲作を行うようになってきている。

ショウガや綿花等の換金作物においても、前年度トウモロコシなどを作付した土地を続けて使用する場合が非常に多い。またその収穫後は、おなじ耕地に

そのままトウモロコシの乾期作を行うケースが多い。キャベツ作はショウガ作より一層常畑的性格が強く、その多くは後述のように村の領域外で作られてきた。

このように、R村への最初の入植以来10年ほどで、ただでさえ最初から少なかったナムトック沢流域の一次林は、コン・ムアンがまず本流沿いを占拠し、あとからきたモンが山腹や尾根筋の森林を開いたことにより、急速に消失した。収穫物の運搬に要する多大な労力等の点から遠方の二次林耕作では割に合わないから、現在では集落や道路に近い手近な休閑地での耕作や常畑的土地利用が卓越するようになった。

### 3. 農業生産の変遷

#### (1) コン・ムアンによる農業生産の変化

1992/93年度と93/94年度におけるR村のコン・ムアン農家の作物別作付面積と作付世帯数は、表1に示されている。まず両年度における陸稲生産を比べると、作付世帯数はほとんど変化がないのに、作付面積は半減している。一方で水稲作付面積をみると、93/94年度のそれは前年度の18ライから27.2ライに急増しており、このうち7割は村外で、つまり低地のコン・ムアン村落で作られている。これは、R村の元共有田では小規模すぎるため、一部の世帯は自分の出身村など低地で比較的大規模な水稲作を行うようになったことを示している。このようにコン・ムアンに関しては、常に新しい森林を求めなければ高い収量が得られず、除草などの労働力投入が大きい焼畑による陸稲作から、収量が安定的に高い水稲作に転換する傾向が明らかである。

トウモロコシは年に2回作付することができるが、表1の作付面積から明らかのように、雨期の生産が主体である。92/93年度には、雨期はコン・ムアンの全世帯がトウモロコシを作付けており、雨期作と乾期作をあわせた作付面積の合計97.25ライは、総作付面積の7割近くに達している。このことから、R村のコン・ムアンにとってトウモロコシがいかに換金作物として重要であったかがうかがえる。ところが翌93/94年度には、作付世帯数の減少と同時に、雨期・



乾期延べの作付面積は38ライと、前年度から6割近くも激減している。一部の世帯は、依然として優良品種を入手したり、除草剤を投入したりして収量増をはかっているとはいえ、今ではR村の多くのコン・ムアン世帯にとって、換金作物としてのトウモロコシの重要性は薄れてしまった。なお同年度の雨期作におけるライ当たりの収益は平均して2,000バーツ程度にすぎず、後述のショウガやキャベツに比べてかなり低い。

トウモロコシと同様、ショウガ生産においても、93/94年度の作付面積は前年度に比べて半減し、作付世帯数は8世帯から2世帯に激減している(表1)。また92/93年度におけるコン・ムアン1世帯当たりの平均ショウガ作付面積0.3ライは、モンのその5分の1にすぎない。この他、一部のコン・ムアンは水稻の裏作として落花生やネギなどの換金作物を栽培しており、落花生の作付は増加傾向にある。

第1表 コン・ムアン農家による作物別作付面積と作付世帯数

| 92/93年度          | [単位：ライ、世帯]     |                |                 |                |               |               | 合計            |               |
|------------------|----------------|----------------|-----------------|----------------|---------------|---------------|---------------|---------------|
|                  | 陸稲             | 水稻             | トウモロコシ<br>(雨期)  | トウモロコシ<br>(乾期) | ショウガ          | 落花生           |               | その他           |
| 総作付面積<br>(%)     | 24.5<br>(16.7) | 18<br>(12.2)   | 86<br>(58.5)    | 11.25<br>(7.7) | 2.5<br>(1.7)  | 2.75<br>(1.9) | 2<br>(1.4)    | 147<br>(100)  |
| 作付世帯数<br>(16戸中%) | 13<br>(81.3)   | 12<br>(75)     | 16<br>(100)     | 7<br>(43.8)    | 8<br>(50)     | 2<br>(12.5)   |               |               |
| 93/94年度          |                |                |                 |                |               |               |               |               |
| 総作付面積<br>(%)     | 12.8<br>(14.8) | 27.2<br>(31.6) | 36.75<br>(42.6) | 1.25<br>(1.5)  | 1.25<br>(1.5) | 4.75<br>(5.5) | 2.25<br>(2.6) | 86.2<br>(100) |
| 作付世帯数<br>(16戸中%) | 12<br>(75)     | 12<br>(75)     | 13<br>(81.3)    | 3<br>(18.8)    | 2<br>(12.5)   | 4<br>(25)     |               |               |

## (2) モンによる農業生産の変化

1992/93年度と93/94年度におけるR村のモン農家の作物別作付面積と作付世帯数は、表2に示されている。両年度とも陸稲は大多数の世帯によって作られており、総作付面積に対する割合も高く、コン・ムアンに比してモンにとってのその重要性がうかがえる。93/94年度の作付面積は前年度の1.4倍に増加し、

第2表 モン農家による作物別作付面積と作付世帯数

|                  |              | [単位：ライ、世帯]     |                |              |              |              |             |       |       |
|------------------|--------------|----------------|----------------|--------------|--------------|--------------|-------------|-------|-------|
|                  | 陸稲           | トウモロコシ<br>(雨期) | トウモロコシ<br>(乾期) | ショウガ         | キャベツ<br>(乾期) | キャベツ<br>(雨期) | 綿花          | その他   | 合計    |
| 92/93年度          |              |                |                |              |              |              |             |       |       |
| 総作付面積            | 84           | 65.5           | 27.25          | 43.75        | 24.5         | 29.5         | 5           | 2     | 282   |
| (%)              | (29.8)       | (23.2)         | (9.7)          | (15.5)       | (8.7)        | (10.5)       | (1.8)       | (0.7) | (100) |
| 作付世帯数<br>(39戸中%) | 31<br>(79.5) | 25<br>(64.1)   | 17<br>(43.6)   | 29<br>(74.4) | 14<br>(35.9) | 10<br>(25.6) | 4<br>(10.3) |       |       |
| 93/94年度          |              |                |                |              |              |              |             |       |       |
| 総作付面積            | 116          | 28.5           | 4.5            | 48.5         | 23.5         | 12           | 17.5        | 12.5  | 263   |
| (%)              | (44.1)       | (10.8)         | (1.7)          | (18.4)       | (8.9)        | (4.6)        | (6.7)       | (4.8) | (100) |
| 作付世帯数<br>(37戸中%) | 36<br>(97.3) | 15<br>(40.5)   | 5<br>(13.5)    | 26<br>(70.3) | 9<br>(24.3)  | 4<br>(10.8)  | 6<br>(16.2) |       |       |

作付世帯数と世帯あたりの作付面積も増えている<sup>4)</sup>。

トウモロコシは、92/93年度の雨期にはモン世帯の約6割が作付けているが、雨期乾期あわせた作付面積93ライの総作付面積に対する割合は、コン・ムアの7割弱にくらべて、3割強と少ない(表2)。翌93/94年度の雨期・乾期延べの作付面積33ライは、コン・ムアの場合と同様に、前年度から6割以上も激減している。現在のR村のモンにおいては、移住初年度や2年目は別として、他の換金作物に比べて耕作面積・労働力投入・販売価格の面で割に合わないトウモロコシは、おもに家畜の飼料用に少量だけ生産する世帯が大半である。

92/93年度、93/94年度ともにモン世帯の7割強がショウガを生産しており、作付面積は増加傾向にある(表2)。生産は、チェンライにある紅ショウガ生産工場からの請け負い方式によっている場合が多い。この場合、農民は工場から種苗と肥料の提供をうけ、その代金は工場の買い上げ価格から利子つきで天引きされる。肥料は投入するが、除草剤は使用しない。通常、ライあたり5,000パーツから10,000パーツ程度の収益が得られる。

4) このように急増した原因については一概にはいえないが、前年度や前々年度に生産したコメが大量に余っている場合、モンは陸稲作を行わないことがあり、92/93年度は多くのモン世帯がその休作の周期にはいていた可能性が考えられる。

モンによるショウガ作は、そこでの収量が高いという理由から、R村から5 kmほど北の幹線道路沿いの878と呼ばれるP村の作り村周辺で行われることが多い(図1参照)。R村の蒙の半分はこのP村の出身であるので、まだ親族が多く残っている878村の土地が簡単に借りられるのである。93/94年度にショウガを生産した蒙の26世帯のうち10世帯は878村近辺で、4世帯が隣村で、12世帯がR村内の番号付耕地で作っているが、村内で作る場合の平均作付面積0.9ライに対して、878村など村の領域外で作る場合は2.7ライに達している。つまり規模の大きな耕作は全てR村外で行われているとみてよい。

キャベツは乾期・雨期の年に2回作ることができるが、生育条件と価格のよい乾期の生産が好まれる。92/93年度には、乾期は蒙の14世帯、雨期は10世帯がキャベツを作付したが、93/94年度にはそれぞれ9世帯、4世帯に減少した(表2)。しかし93/94年度にはショウガが病害のため不作であったため、翌94/95年度の乾期にキャベツを作付した蒙は24世帯と、前年度の2倍以上に急増している。キャベツ作は、肥料・農薬・人員雇用などに多額の資金を要する。しかしその収量は不安定であるうえに、価格の変動に左右されやすい。93/94年度の雨期の各世帯のライ当たり収益は、最低1,000バーツから、最高1万バーツまで差がはげしいのが特徴である。

キャベツは、常時スプリンクラーによる散水を必要とするため、水の補給がつねに可能な場所で行われる。そのためR村の蒙は基本的に、水の便がよく気候の冷涼なL村の近辺で土地を借りて生産を行っていた(図1参照)。しかし94年の乾期作からは、国境に近いL村で他村の者がキャベツ生産を行うことが禁止されたため、ほとんどの世帯がR村の近辺、おもにンガオ川沿いで作らざるをえなくなった(図2)。

綿花を作付した蒙の世帯数は、92/93年度の4世帯から93/94年度は6世帯とさほど変化していないが、作付面積は飛躍的に増えている(表2)。元村長の蒙が町の商人と交渉して、種苗と農薬の提供を受けて生産を請け負うことになったからである。93/94年度の場合、世帯によって若干の差はあるが、肥料と除草剤を若干投入して、1ライあたり1,000バーツ程度の収益をあげてい

る。

93/94年度には、村内ではじめて、換金作物としてモロコシ (*khaw pang*) を実験的に作付したモンが11世帯あった。これはホウキの材料として利用されるもので、モンの一人が直接ホウキ工場まで出向いて交渉し、種苗を購入してきたものである。

### (3) 小結

ここまでみてきたようにR村の農業経営は、92/93年度と93/94年度の両年を比べてみるだけでも、大きな変動にさらされている。モンの総作付面積の合計はほとんど変化がないが、換金作物のバラエティが増えているのに対し、コン・ムアンの場合トウモロコシ作の減少を反映して作付面積の合計が前年度の半分ちかくに激減し、農業離れの傾向が強まっている。コン・ムアンで作付面積が増加しているのは水稲とその裏作の落花生のみである。

94年には、あるコン・ムアン農家はついにR村内での陸稲およびトウモロコシ生産をやめ、低地の出身村での水稲作と常畑でのトウモロコシ作に全面的に切りかえている。また、低地の出身村に水田を所有しない一部のコン・ムアンは、ナムトック沢にあらたに水田を開墾した(図2)。同時にバンコクなどに出稼ぎに行く者が増え、焼畑農業は本気で打ち込む対象ではなくなっている。このようにR村のコン・ムアンは、焼畑による〈陸稲(食糧)+トウモロコシ(換金作物)〉という入植当初の生業パターンから、〈低地での水稲(食糧)+賃労働〉という入植以前の生業パターンに戻りつつある。

調査地域周辺のモンは、他地域のモンと同様、前述の紛争終結以前は重要な現金獲得源として、非合法のケシ栽培を盛んに行っていた。この頃からトウモロコシも作られていたが、それは販売用というより、主として豚やニワトリの飼料用として生産されていた。R村に入植してきたモンの多くは、入植初年度はまず自給用の陸稲のみを生産し、次に余裕があればトウモロコシを2~3年作付して販売し、資金を貯めた後にショウガ等の高値の換金作物生産を始めた。つまりモンにとっても、R村に入植してきた頃支配的だった〈陸稲(食糧)+

トウモロコシ（換金作物）という生業パターンは過渡期のものであった。現在ではトウモロコシを販売用に作る者はほとんどなく、大方飼料用として生産されている。つまり〈陸稲＋高値の商品作物＋飼料用のトウモロコシ〉という、紛争終結以前のパターンに戻ったのである。以前は商品作物がゲシであったが、今はキャベツやショウガや綿花を作るようになってきているだけの違いである。

コン・ムアンのように容易に出稼ぎができず、農業生産以外に収入の機会がほとんどないR村のモンは、商人や工場から話をつけてきては、ショウガやキャベツ以外にも様々な換金作物を生産している。売れる作物なら何でも作り、その時々条件の有利・不利で、融通無碍に作物を変更する。94/95年度には、初めての試みとして、一部のモン世帯は紙の原料となるカジノキを工場の請負で作ることを決めていた。

このように、コン・ムアンにとってもモンにとっても、入植後しばらく続いた〈陸稲＋販売用のトウモロコシ〉という耕作パターンから、どちらも入植以前の生業パターンに戻りつつある。コン・ムアンは水稲作と出稼ぎにますます力を入れ、モンは常畑的な換金作物の生産をいよいよ盛んに行っている。商品作物のみならず、モンにおいては、入植当初まで典型的な焼畑方式で作られていた陸稲まで常畑化しつつある。また一部のコン・ムアン農家による販売用のトウモロコシ生産も常畑化している。そのためR村の農民は傾斜地での常畑的土地利用のもたらす、地味の低下と雑草の繁茂という問題に直面し、それに対処するために除草剤と肥料とを恒常的に使用せざるをえなくなっており、少なからぬ資金を投入するようになった。

#### 4. 農業生産をめぐる社会関係

##### (1) 農作業における労働力の調達

農作業において自家労働では足りない場合、通常コン・ムアンは世帯間の互酬的労働交換（*ao mue kan* あるいは *wan kan*）を行う。R村では、コン・ムアンが陸稲作と販売用のトウモロコシ作に力を入れていた時代には、労働交換は

盛んに行われていた。とくに陸稲の播種、脱穀、運搬等においては、村内のほとんど全ての世帯が一度に集まって作業をした。また、入植当初村落内の多くのコン・ムアン世帯が、ナムトック沢本流の最奥部で一次林を伐開して陸稲作を行った際には、お互いに場所的・条件的に近いところで行ったために、伐開や収穫物の運搬などに関して協力しあうことが可能であった。逆に、大勢の協力関係を前提としてこそ、このような遠方での耕作が可能だったのである。

現在でも、陸稲の脱穀・運搬、トウモロコシの収穫・運搬などの作業は、特定の隣人とグループを組んで労働交換で済ませる場合が多く、ふつう陸稲作とトウモロコシ作では雇用による労働力調達は行われぬ。ところがいちはやく水稻作への一本化をはかったあるコン・ムアン農家の事例をみると、一時的に多人数を必要とする水稻の移植時と収穫時は、雇用労働を多用している。これは、一定以上の規模の水稻作が村内でほとんど行われていないR村では、水稻作業の労働交換の相手を探すことが難しいことを意味している。逆に低地でそういう相手を探すことは容易で、一部のコン・ムアン農家は、低地の出身村との、農作業での労働交換を通じた緊密な人間関係をいまだに保ち続けている。

モンの場合も、自給作物である陸稲の生産は、基本的に自家労働と互酬的労働交換 (*pauv zog*) で賄っている。労働交換の相手は、血縁関係になくとも親しければ誰とでも組む、という傾向がある。また、モンもコン・ムアンと同様に、878村など他村の親戚や知人とも労働交換を行っている。

一方、代表的な換金作物であるキャベツ作とショウガ作は、ともに雇用労働に大きく依存している。ここで注目すべきなのは、L村付近のキャベツ生産において、近年流入してきた土地なしの山地民アカ族が大量に雇われていることである。また878村におけるショウガ生産の場合、雇われた蒙のなかには、隣村に移住してきたばかりのラオスからの元難民が多く含まれている。近隣村にミャンマーから最近流入してきたラフ族が雇われる例もある。このように、他地域から流入し、今も急激に増えつつある土地なしの山地少数民族が、この地域のモン等による商品作物生産に対して大量の労働力を提供している。

## (2) 耕地の貸借および農業資金の入手先

R 村内において地主小作関係はほとんどみられない。特にモンどうしの間では、土地のない親族や新来者に無料で土地を貸し与える習慣があり、地代は原則として受け取らない。878村でのショウガ作など商品作物を作るときでも、親戚などから耕地の無料貸与を受けることが一般的である。また本村に入植してきたモンは、もといたP村やS村の耕地をあっさりと放棄してきている。つまりモンには、コン・ムアンとちがいで、もともと占有した土地に関する権利の観念が薄かったとみることができる。

しかし、人口の急激な増加は土地の商品価値を高め、定住による権利関係の固定は、土地を財産とみなす傾向を強める。実際にL村でのキャベツ栽培においては、モンどうしの間でもしばしば土地の賃貸借が行われている。また、94年にはR村のモンがPa村など低地のコン・ムアンから水田を賃借して、キャベツ栽培を行う事例が多数みられた。

正式の土地所有権がないR村の村民は、土地を担保に銀行や農協から資金を借り入れることができない。そこで、商品作物の生産に力をいれているモンの場合は、近しい親族から初発時の資金を借り入れる場合が珍しくない。たとえば、ショウガ作やキャベツ作で前年度に儲けた一家に頼んで借り入れ、自己の資金とするのである。

## 5. 結 論

以上、R村におけるコン・ムアンとモンの、急変する環境に対する適応の仕方の違いをみてきた。現局面における帰結を一言で要約すれば、R村における森林資源の枯渇は、①コン・ムアンの焼畑農業離れとそれに伴う水稲作と賃労働への依存、②モンの定着のかつ常畑的な自給・換金作物生産の拡大、とをもたらしている。

R村のコン・ムアンにおいては、入植者の多くはすでに離村し、残った者は出稼ぎによる賃労働の機会を積極的に求めるようになると同時に、R村及び低

地の出身村での水稲作や常畑作に力を入れるようになった。同時に村内の働き盛りの壮年が減って、自家労働力が不足し、お互いに労働交換も難しいような状況になっている。その結果コン・ムアンの多くにとっては、本村での焼畑農業に力を入れる意味が薄れている。KUNSTADTER et al. [1978 : 202, 222] は、コン・ムアンの農民にとって山間地での焼畑農業は、もともと人口圧による耕地不足に強いられた応急的な手段であり、水田耕作による食糧生産と賃労働による現金収入を補完するものでしかないと主張しているが、このような指摘はR村の事例をみる限り当てはまっている。

一方モンは、従来から、耕地が疲弊するまで利用し尽くして放棄するという資源収奪的な方法で、他部族の労働力に頼って換金作物（ケシ）生産を行うことで悪名が高い [KUNSTADTER et al. 1978 : 10-12]。かかるステレオタイプ化されたモンに対するイメージは、それをすぐに一般化することは危険であるとしても、R村の事例においてそれを覆すことは難しい<sup>5)</sup>。いずれにしても、現在の居住地に政治的あるいは経済的な問題が生起すれば次々と好きな場所へ移住する<sup>6)</sup>という、少ない人口に対する広大な土地を前提とした従来の蒙の基本的な移動耕作のスタイルは、従前の人口／土地関係が全く逆転し、利用可能な耕地の窮乏とありあまる労働力という事態が生みだされている現在では、これ以上続けることができないのは明白である。

KUNSTADTER et al. [1978 : 215] や COOPER [1984 : 61] は、常畑的で同一耕地に10年以上連続して作付することが可能なケシ栽培と、2～3年おきに

5) このようにR村のコン・ムアン及びモンによる農業形態の適応・変化が、あたかもステレオタイプ化された民族像という図式にのっとって起こっているかのようにみえることの意義については、本来ならば本村の両民族が置かれている特殊事情、すなわちコン・ムアンについてはその貧しい出自、モンについては彼らが近年まで反政府勢力側について山中にこもって戦っていた等という固有な事情を考慮し、他地域における変化と比較した上で論ずる必要があるが、それについては今後の課題としたい。

6) 60年代半ばの調査によれば、蒙の移動性は他の山地少数民族と比べてはるかに高く、同じ場所に6年以上住んでいる者はその16.5%にすぎない [GEDDES 1976 : 42]。



耕地を次々とかえていかねばならない焼畑による陸稲作及びトウモロコシ作との間の矛盾を指摘している。R村のモンも、キャベツやショウガなど常畑的な換金作物生産を行う一方で、移動耕作による陸稲作も並行して行ってきた。しかし、新たな移住先や、手近に利用可能な一次林や二次林を探ることが困難な現在、R村の少なからぬモンはすでに、その陸稲作においてすら傾斜地の常畑的な土地利用を行うようになってきている。つまり、定着的な商品作物栽培と移動的な陸稲作の矛盾の現時点における暫定的な解決策として、モンは自給・換金作物双方の、肥料や除草剤の投入による常畑的土地利用という方法に傾きつつある。だが、かかる肥料と除草剤の投入には資金が必要である。これは、流入してきたばかりの難民や貧しい農家にとっては、自給用の陸稲作すらまともにできる環境でなくなりつつあることを意味する。

R村及びその周辺地域の山間部の農業を担っているのは現時点では明らかにモンなどの山地少数民族であり、その比重は今後いよいよ増していくと考えられる。なぜなら、第一に少数民族であるモンは、文化的抵抗が大きいために低地へ出稼ぎに出たりそこで生活の基盤を得ることがコン・ムアンに比べて難しいので、現金収入源は換金作物生産に大きく依存せざるを得ない。特にR村周辺のモンは、近年まで反政府勢力側について山中に隠れてタイ政府軍と戦ってきたか、でなければ難民としての境遇にあったかのどちらかであるので、外部社会とのギャップは一層大きいと考えられる。第二に、R村内の人口構成だけを考えても、若者や子供の比重が大きく、現在および将来の労働力が豊富に存在する。さらに最近では、周辺村落のモン及びその他の山地民の人口が急増している。

たとえば、最初はR村と同様にコン・ムアンの入植村としてはじまり、今では完全にモンの村となった北隣の村においては、1987年には30数戸にすぎなかった世帯数は、1993年には90数戸に急増している。新規移住者の多くは、戦乱のラオスから避難してきたモンである。また、人口の半分近くがR村に移住したP村には20数戸が残留しているにすぎなかったが、その後多数の元難

民を受け入れ、1994年には80戸にまで激増している<sup>7)</sup>。かかる山間部の急激な人口増は、いま現に起こっている諸問題を予想を越えて深刻なものにしており、その解決を一層急を要するものになっている。

### 引用文献

COOPER, ROBERT

1984 *Resource Scarcity and the Hmong Response*, Singapore University Press.

GEDDES, WILLIAM R.

1976 *Migrants of the Mountains: The Cultural Ecology of the Blue Miao (Hmong Njua) of Thailand*, Oxford University Press.

KUNSTADTER, PETER et al. eds.

1978 *Farmers in the Forest*, University Press of Hawaii.

ROYAL FOREST DEPARTMENT

1985 *Forestry Statistics of Thailand 1985*.

1995 *Forestry Statistics of Thailand 1995*.

---

7) このように多数の移住者を受け入れるのは、どの村も「支村」としての境遇から、通常の行政村に格上げされたいと考えており、それには一定数以上の人口が必要だからである。